

# 3. 教 育

---

Education



## 【1】 人財育成の取組

### 1. 「教育」が目指す人財育成像

学部縦割りであった教育課程を見直し、地域志向型人財として必要な知識・技能の育成という視点から教育課程を再編する。再編は、文理の枠を越えて総合的にアプローチできる文理融合型人財育成、青森県の戦略プロジェクト(①人口減少克服、②健康長寿県、③食でとことん)や、弘前市の「市民参加型社会」の実現に特化した人財育成(地域特定プロジェクト志向専門人財の育成)などの視点から行う。また、学修達成度を判断する評価基準「ルーブリック」と、学修の蓄積・可視化を可能にする「地域志向e-ポートフォリオ」による教育の質の保証を確立する。これらを実施することにより、地域志向型人財(①グローバルマインドを持ち、地域に対する愛着、地域の創造を目指す意欲をもった人財、②複雑化する地域課題に文理の枠を越えて、総合的にアプローチできる文理融合型の人財、③獲得した専門知を活用して、地域の課題解決を主導できる人財)を育成する。

### 2. 目指す人財育成のためのカリキュラム改革

地域志向型人財として必要な知識・技能の修得という視点から、教育課程を再編する。

#### ■ 文理融合型／地域特定課題を解決できる人財育成

#### (1) 地域「実践力」を育成する初年次教養教育

- a 青森を対象とした課題解決型学修「地域学ゼミナール」の必修化 (教養教育 2単位)
- b 青森の歴史・文化・特色を学ぶ科目群「ローカル科目」の必修化 (教養教育 2単位)

#### (2) 入学から卒業までの「地域を志向したキャリア教育」 (教養教育 必修 2単位×2科目)

#### (3) 「専門知」と「地域の課題」を交差させる「専門力」の育成

- a 分野横断的内容(文理両面からアプローチ)／青森に関する内容／能動的学修の3つをコンセプトとした科目群「学部越境型地域志向科目」を新設・必修化 (教養教育 2単位)
- b 地域の特定プロジェクト(青森県の戦略プロジェクト、弘前市の「市民参加型社会」)を実現できる専門人財育成のための教育プログラムの開発、本学独自の称号の付与

### 3. 地域志向カリキュラムの特徴

#### ■ 卒業までに少なくとも5科目以上地域志向科目を履修

1年次の「ローカル科目群」「地域学ゼミナール」「キャリア形成の基礎」、2年次以上の「学部越境型地域志向科目群」「キャリア形成の発展科目群」を必修化。

#### ■ 教育の質の保証

ルーブリック(評価基準)とe-ポートフォリオ(学修のふりかえり)を活用した学生自身のPDCAサイクルの確立。

地域志向カリキュラムのスケジュール

学 年	1 年 (前期)	1 年 (後期)	2 年	3 年	4 年
地域に関する 科目	選択必修 ローカル 科目群	必修 地域学 ゼミナール	選択必修 学部越境型地域志向科目群		
キャリア教育		必修 キャリア 形成の基礎	選択必修 キャリア形成の発展科目群		
地域特定 プロジェクト			地域特定プロジェクト志向専門人財 育成のための教育プログラム		

4. 卒業後の学生のイメージ

地域志向カリキュラムを履修した学生の卒業後のイメージは以下の内容である。

- 食・農を中心に、ニュー・ビジネス開発ができる「起業家(アントレプレナー)」
- 観光活性化による交流人口増加や農漁村の地域経営の確立において中核となる人財
- 予防医療や高齢者の生きがいを生み出すまちづくりを牽引する人財

## 【2】平成27年度の取組

### 1. 地域志向カリキュラムの実現

入学から卒業まで一貫した地域志向教育を実施するために、平成28年度入学生から、1年次の「ローカル科目群」（選択必修）「地域学ゼミナール」（必修）「キャリア形成の基礎」（必修）、2年次以上の「学部越境型地域志向科目群」（選択必修）、「キャリア形成の発展科目群」（選択必修）を必修化する。平成27年度は、これらの科目群のうち「ローカル科目群」「地域学ゼミナール」「キャリア形成の基礎」「学部越境型地域志向科目群」を試行的に実施した。

#### ■ ローカル科目群

ローカル科目群は青森の歴史、特色、課題等について知る講義形式の科目群である。科目は「青森の行政」「青森の経済・産業」「青森の文化」「青森の歴史」「青森の芸術」「青森の民族・芸能」「青森の自然」といったカテゴリー（科目名）で構成されている。平成27年度は、「地域活性化について」（青森の経済・産業）「青森の歴史」（青森の歴史）「青森の地理」（青森の自然）が試行的に実施され、合計216名の学生が受講した。

#### ■ 地域学ゼミナール

地域学ゼミナールは、学部横断でのクラス編成を実施し、自分とは来歴や背景の異なる異質な他者と協働して、自立的に学修する力を涵養する。授業は青森に関する内容をテーマとして、学生自身の力によって問題設定・解決策の提案を行う問題解決学習（PBL）の形式で展開する。

地域学ゼミナールは1年次後期に開講される。このタイミングで開講する意図は、1年次前期に履修した基礎ゼミナールで培う自立的な学習態度を継承・発展することにある。基礎ゼミナール・地域学ゼミナールの有機的な連結を通して、自立的な学修の礎を確固たるものとし、これ以降の教育課程内外の学生の学びを更に充実させる。

地域学ゼミナールは全学必修科目であるため、平成27年度は、地域学ゼミナール試行を実施した。試行に先立って、担当教員に対するFDを実施し、問題解決学習を展開するための主要な手法とするブレインストーミングとKJ法の演習を実施した。その後、試行科目を前期2科目、後期4科目実施した。履修学生は合計56名となった。また、試行を通して得られた知見を「地域学ゼミナール手引」として集約し、平成28年度からの本格実施の条件を整えた。

地域学ゼミナールは、教員・学生比が高い。そのため、教員にとっては負担が大きく、不安も決して少なくない。平成27年度の試行では小規模クラスでの授業となったが、本格実施が始まる平成28年度以降、1年生約1,300名を90名のクラスに編成し、各クラス3名の教員が指導していくことになる。中規模クラスでの問題解決学習の実践には不透明な部分も残された。

しかし、平成27年度の試行担当教員からは地域学ゼミナールを通して学生たちの能動的な学びが促進されるという確かな手応えを報告する声が多数上がっており、本学は地域学ゼミナールの意義についての確信を深めている。この意義を十二分に発揮させるためにも、平成28年度は問題解決学習の指導のノウハウを更に蓄積・共有するとともに、COC推進室による担当教員へのコンサルテーションを充実させることで、1,300名規模の問題解決学習の運営という難題に挑戦していく。



地域学ゼミナール

### ■ 学部越境型地域志向科目群

学部越境型地域志向科目群では、高度化・複雑化する地域の諸問題に対応する力を身につけるために、より学際的な観点から問題解決学習を行う。学生は、それまでに学んだ教養や専門知を活用して問題の設定や解決に取り組む。また、学部越境型地域志向科目群では、学生は実際に青森に飛び出し、知識と経験の双方から青森の課題にアプローチするように求められる。高い学術性と深い当事者意識の涵養が意図されている。

学部越境型地域志向科目群のカテゴリー（科目名）は、「青森の多様性と活性化」「青森の食と産業化」「市民参加と地域づくり」「青森エクスカージョン」「地域プロジェクト演習」で構成されている。平成27年度は試行科目として「地域課題解決の実践」（地域プロジェクト演習）、「地域メディア活用の実践」（地域プロジェクト演習）が開講され、合計28名の学生が履修した。



地域課題解決の実践



地域メディア活用の実践

### ■ キャリア形成の基礎

学士課程において、一貫して地域志向のキャリア形成を支援するために、1年次後期必修科目として「キャリア形成の基礎」を実施する。授業内容は、「キャリア概論」「地域の職業を知る」「弘前大学で学ぶべきことを考える」の3部で構成されている。地域の職業人の招聘については、COC推進室のコーディネーション機能が果たす役割が大きいと期待されている。

## 2. 教育関連FD

### ■ 新しい教養教育に向けたブレインストーミング及びKJ法勉強会

平成27年4月7日(火)、弘前大学21世紀教育センターが主催する「新しい教養教育に向けたブレインストーミング及びKJ法勉強会」に、COC推進室の西村君平助教が講師として参加した。

本学では、教養教育改革の一環として教養教育にアクティブ・ラーニングの考え方を取り入れ、全学生が個人あるいはチームで能動的に学習していくための知識や技能・態度を習得することを目指している。

今回の勉強会は、平成28年度からの新たな教養教育の本格実施に向けて進められている、「基礎ゼミナール」、「地域学ゼミナール」へのブレインストーミング・KJ法試験導入に係るものであり、「基礎ゼミナール」、「地域学ゼミナール」の試行担当教員を参加者として、ブレインストーミング・KJ法をワークショップ形式で練習した。



### ■ 「平成27年度弘前大学教養教育に関するFD」を開催

平成28年2月16日(火)、弘前大学教育学部大教室において、「弘前大学教養教育に関するFD」を開催した。

今回のFDでは国立教育政策研究所の立石慎治高等教育研究部研究員が、「学生の社会的・職業的自立のために弘前大学がなすべきこととは」をテーマとして基調講演を行った。その後、岩手大学教育推進機構の後藤厚子特任准教授から「地域課題をテーマとしたPBL導入の取組について」の報告があった。最後に、本学農学生命科学部の藤崎浩幸教授、COC推進室の西村君平助教から「地域学ゼミナールについて」の報告があった。

当日は各学部・研究科等から約100名を超える参加者があり、会場は熱気に包まれた。



## 【2】 ルーブリック・e-ポートフォリオ

### 1. 概要

学生が地域志向の学びを深めていくためには、学生自身が明確に目標を設定し、その目標の達成に向けて絶えず自らの学びをモニタリングし、改善していく必要がある。この学修のPDCAを支援するためのツールとして、ルーブリック・e-ポートフォリオを開発した。

ルーブリックは、学生が身に付けるべきパフォーマンスの質を、表の形でわかりやすく「見える化」したものである。縦軸には、パフォーマンスの質を構成する要素が基準として表現されており、横軸には基準の発達段階が尺度として表現されている。ルーブリックによって、目指すべき人財像を教授・学修の文脈に即して具体的にイメージすることが可能となる。本学のCOC事業に関しては、「地域志向人財ルーブリック」を開発した。

ポートフォリオとは、学生が授業や課外活動を通して作成したレジュメ、レポート、プレゼンテーション資料、工学的・芸術的作品等を収集・整理したエビデンス集で、学修のモニタリングの基盤となる。これを電子化したものをe-ポートフォリオと呼ぶ。本学ではオープンソースのeラーニングシステム「Moodle」を活用して、独自のe-ポートフォリオシステムの開発を予定している。

ここでは平成27年度に開発が大きく進んだ「地域志向人財ルーブリック」について説明する。

### 2. 地域志向人財ルーブリック

本学は、地域志向教育を進めるにあたって「地域志向人財」という教育目標を掲げた。この人財像は、「グローバルマインドを持ち、地域に対する愛着、地域の創造を目指す意欲をもった人財」「複雑化する地域課題に文理の枠を越えて、総合的にアプローチできる文理融合型の人財」「獲得した専門知を活用して、地域の課題解決を主導できる人財」という3つの側面から構成されている。これを1側面あたり3つの基準に分解し、それぞれの基準について、「0 無関心」「1 初歩・入門」「2 主体化・内面化」「3 成熟化・省察化」「4 実践・貢献」の5段階の尺度を設定した。これにより学生は自分が青森という地で活躍するために必要な力を包括的かつ個別的に知ることができる。

地域志向人財ルーブリックが、学生の学びをガイドする機能を果たすためには、まずルーブリックが学生に理解されなくてはならない。そのために本学が掲げる人財像である「地域志向人財」とは何か、学生(ひいては教員や地域社会)に理解してもらうために、教員による基準の解説ページをCOC事業ウェブサイトにて設けた。我々は、教員による基準解説ページを読むことで、基準に込められた膨大な含意に気づくことができる。基準解説ページは、平成28年度以降も引き続き拡充していく予定である。

ルーブリックについては、平成28年度から開講される「キャリア形成の基礎」「キャリア形成の発展科目群」にて学生に周知するとともに、ルーブリックを通して大学での学びや将来の青森におけるキャリア形成の展望を描く授業を実践する予定である。

地域志向人財ルーブリック

		尺度					
		実践・貢献	成熟化・省察化	主体化・内面化	初歩・入門	無関心	
		4	3	2	1	0	
態度系	育成する人財像						
	グローバルマインド	異なる価値観をもつ人と積極的に関わり、共生・協働できる	異なる価値観を持つ人を尊重し、その価値観を受け入れることができる	異なる価値観を理解することはできる	異なる価値観をもつ人がいることを知っている	異なる価値観をもつ人がいることを知らない	
	地域志向 (愛着・コミットメント)	多角的な地域理解に基づき、自覚的に地域に根を下ろして活動している	地域について多角的な知識を有し、その実態を複眼的に理解している	地域の歴史や文化、経済等を自ら学んでいる	地域について初歩的なことを知っている	地域に関心が無い	
教養系	創造を目指す意欲	既存の枠組みにとらわれず、多種多様なアイデアを出すことができる	独創性を感じさせるような質の高いアイデアを出すことができる	普遍的に積極的にアイデアを出そうと努力している	現状を多少改善するような簡単なアイデアを出すことができる	現状に満足し、創造を目指すとうとしない	
	文理の基礎的な教養	文理を問わず、幅広い分野の基礎知識を体系的に学修している	文理を問わず、幅広い分野に興味を持ち、学修している	幅広い分野について学修している	自分の関心に従い、幾つかの分野の学修を始めている	知識を求めない	
	他領域の専門家との協働	自分と異なる領域の知識や技能、考え方を理解して尊重し、柔軟に協働できる	はつきりした役割分担のもとで、他領域の人と一緒に活動することができる	異なる領域の専門家と関わるができる	自らの専門領域の中で他者と協働できる	他者と協働できない	
専門系	複雑な課題にアプローチする力 (課題解決能力)	自らの知識やスキルを活用し、複雑な課題を多角的に分析できる	自らの知識やスキルを活用し、複雑な課題を分析できる	教員等の支援のもとで、複雑な課題を分析できる	単純な課題を分析できる	課題をどのように分析して良いのかわからない	
	専門的な知識・技能	専門知を体系的に理解し、その発展に貢献できる	専門知を体系的に理解している	個々の専門知を自分の中で有機的に関連づけて理解している	入門的な専門知を断片的に有している	専門知を有していない	
	獲得した専門知を活用して地域の課題解決を主導できる人財	体系的な専門知を活用し、実効性のある地域課題分析と解決提案を行える	体系的な専門知を用いて、地域課題の分析と解決策の提案を行える	幾つかの専門知を用いて、地域課題を自分なりに解釈できる	入門的な専門知を用いて、地域課題を自分なりに解釈できる	専門知を活用できない	
	リーダーの役割	目標の実現に向けてチームを組織し、メンバーを動かすことができる	チームの各々人と関わるることができる	リーダーとしてやるべきことを知っている	リーダーの漠然としたイメージを持っている	リーダーの役割が全くわからない	

## 【3】 地域教育プロジェクト

### 1. 地域教育プロジェクトの概要

地域教育プロジェクトは、正課外の地域志向教育の総称である。地域志向カリキュラムの開発は、過去に本学が進めてきた教育改革を活かす形で推進されている。その一方で地域志向教育の充実という新しい挑戦に取り組むためには、既存の大学教育の枠にとらわれずに、ゼロベースで地域志向教育を模索していくことも必要となる。この必要を満たすべく、平成27年度より正課外の教育活動として発足したのが、地域教育プロジェクトである。地域教育プロジェクトの実践を通して、正課内のみならず正課外の地域志向教育を充実させるとともに、明日の地域志向教育の姿を模索していく。

### 2. 地域交流人口増加プロジェクト in 大間



#### ■ 概要

NPO法人ぷらっと下北代表の島康子氏を講師として、函館に来る台湾人観光客を青森県大間町に呼び込んで、大間町民の生活航路「函館大間航路」を守るという課題に、学生とともに取り組んだ。学生4名の参加があり、函館・大間をフィールドに、台湾人観光客や函館の観光地の職員、大間の観光業のキーパーソンを対象にインタビュー調査を実施した。

#### ■ 目的

- (1) 島氏が実践する「おもしろがる心ですすめるまちおこし」の精神を体得すること。
- (2) 現地調査を通して、函館大間航路の存続に資する実効性のある提案を行うこと。

#### ■ 課程

学内にて調査仮説の構築を行い、函館、大間の現地調査を行った。函館の現地調査では20名程度の台湾人観光客に街頭インタビューを行った。また、並行して20名程度の函館の観光拠点の職員・店員にも街頭インタビューを行った。大間では、島氏から紹介のあった大間の観光振興のキーパーソン5名、観光客10名程度にインタビューを行った。

最終日には、学生から台湾人観光客の誘致に関する提案を行った。調査を通して、大間の漁師が台湾で信仰される海の守り神「媽祖」を信仰していることが明らかになり、媽祖信仰を活用した新しい観光商材の提案が行われた。また台湾人観光客への街頭インタビューで明らかになった、台湾人の「小吃文化(屋台や夜市での小皿料理の食べ歩き)」に着目したおもてなしのあり方が提案された。



大間町内での街頭インタビュー



大間町民との交流

## ■ 成果

- (1) 媽祖信仰の観光商材としての活用に見られる、学生のユニークな提案は、島氏の「おもしろがる心」に大いに触発されたものであった。プロジェクト終了から半年後に学生にフォローアップ調査を行った際には、学生全員が引き続き地域志向の活動に取り組んでいることが明らかになった。学生は島氏の「おもしろがる心」の一端を引き取って、自らの地域志向性を高めたとと言える。
- (2) 学生の提案の一部は、ぷらっと下北の新企画案として検討されることが決まった。

## ■ 次年度の展望

企画の提案にとどまらず、企画の実施と評価にいたるプロジェクトを立ち上げる予定である。

## 3. 西目屋村 地域メディア魅力向上プロジェクト

地域教育プロジェクト Vol.2  
西目屋村 地域メディア魅力向上プロジェクト

# テレビ番組 つくってみます？



## 募集

**【特別講師・番組制作協力者】**  
工藤 健  
《「いつ・もの・こと 目屋新聞」編集者》

**【参加対象者】**  
弘前大学に所属する学生  
■ 参加者は学生教育研究災害傷害保険（学研災）等に加入する（している）必要があります。  
■ 交通費は弘前大学が負担します。

**【ガイダンス開催日】**  
平成27年11月19日（木）12時～13時  
場所：総合教育棟207

**【申込み方法】**  
下記メールアドレスに連絡 締め切り：11月17日（水）

**【申込み先】**  
OOC推進室（野口） [noguchi@hiroakiri-u.ac.jp](mailto:noguchi@hiroakiri-u.ac.jp)

**【本プロジェクトに対しての質問・相談】**  
OOC推進室（西村） 0172-39-3863

**工藤氏プロフィール**  
30歳、弘前市在住。2012年に東京都から弘前市に引っ越し。  
「いつ・もの・こと」はご近所の井戸端会議や日常雑談で話題になりそうな「いつもの」の日常をテーマにした地域メディアで、地域のコミュニケーションを豊かにし、人々の絆を育もうとするものです。

## ■ 概要

弘前市の西隣に位置する西目屋村にて、ケーブルテレビ「西目屋テレビ」が近年になって整備された。文字放送中心の番組構成になっていたが、「西目屋村にも魅力的な地域の番組を！」という声が村から挙がり、本学が協力する形で本プロジェクトが始まった。紙媒体の地域メディア「いつ・もの・こと 目屋新聞」の記者を務める工藤健氏を番組制作協力者とした。学生9名の参加があった。

## ■ 目的

- (1) 番組制作を通して、学生の視点で西目屋村の魅力を発掘し、地域への愛着を高めること。
- (2) 工藤氏と活動を共にすることで、取材のノウハウや地域との関わり方を学ぶ。

## ■ 課程

学内にてガイダンスを開催し、本プロジェクトの概要や工藤氏と西目屋村の関わりなどを学修した。後日、2つの班に分かれて現地取材を行った。どちらも取材協力で工藤氏が同行した。取材終了後、振り返りワークショップを開催し、番組のブラッシュアップを行った。番組完成後、学内にて成果報告会を開催した。



現地取材



振り返りワークショップ

## ■ 成果

- (1) 幅広い世代の視聴者を意識した番組制作をすることで、取材やテロップの言葉遣いを工夫するなど、視聴者側の立場で物事を考える必要性を学んだ。
- (2) 工藤氏の地道な取材活動が、地域との信頼関係を生み、それがベースにあることで今回のプロジェクトが成立したことを学んだ。
- (3) プロジェクト終了後も、学生2名が継続して工藤氏と共に番組制作を続けている。

## ■ 次年度の展望

工藤氏と継続して活動している学生を軸に、学生に主体性を持たせた番組制作を目指していく。

## 4. 三沢市 民具保存・活用プロジェクト

地域教育プロジェクト Vol.3  
三沢市 民具保存・活用プロジェクト

**残そう！**  
**南部の民具を次世代へ**

急募

**【講師】**  
山田 巖子 教授  
(弘前大学人文学部)

**【参加対象者】**  
弘前大学に所属する学生  
■ 参加費は学生証を研究費補助金(学研費)等に加入する(している)必要がありません。  
■ 交通費は弘前大学が負担します

**【第1回ワークショップ「民具に触れる」開催日】**  
平成27年 11月20日(金) 15時~17時  
集合場所：弘前大学資料館

**【申し込み方法】**  
下記メールアドレスに連絡 締め切り：11月18日(水)

**【申込先】**  
COC推進室 (窓口) noauchi@hiroaki-u.ac.jp

**【本プロジェクトに対しての質問・相談】**  
COC推進室 (西村) 0172-39-3863

**【プロジェクトに対する願い】**  
小川原湖民俗博物館の民具は、南部の生活の歴史を知る上で、欠かすことのできない歴史的な資料です。資料としての価値を損なうことなく、次の世代に伝えるために、学生の立場から一緒に考えたい。

## ■ 概要

小川原湖民俗博物館(青森県三沢市)は、温泉の附属博物館だったが、経営者交代後に閉館され、平成27年4月に解体が始まった。国・県・市有形民俗文化財に指定されているものは博物館などに移蔵されたが、残りの資料のうち300点が本学に運ばれた。このような問題は、日本全国の課題であり、青森県に限った話ではない。

それらの民具の保存と活用を考える地域教育プロジェクトを、本学人文学部の山田巖子教授とCOC推進室が連携し実施することになった。計10名の参加があった。

## ■ 目的

- (1) 「行き場を失った民具の保存・活用」という地域課題に向き合うことを通して、創造を目指す意欲と、複雑な課題にアプローチする力を養う。
- (2) 地元メディアによる本プロジェクトの発信を促し、民具保存の必要性を世論に訴えていく。

## ■ 課程

ワークショップ「民具に触れる」を開催し、まずは参加学生の民具への理解を促した。

後日、民具保存・活用のヒントを探すため、旧小川原湖民俗博物館跡地など三沢市内のフィールドワークを実施し、持ち帰った情報をもとにアイデア出しのワークショップを計2回開催し、学生による提案を成果報告会で行った。



現地フィールドワーク



アイデア出しワークショップ

## ■ 成果

- (1) 山田教授やフィールドワークに同行した元・学芸員による助言をもとに、複雑な課題の分析に着手することができた。
- (2) フィールドワークで得た情報や参加メンバーのアイデアを参考に、独創性を感じさせるような質の高い提案が行われた。
- (3) 陸奥新報に3回、デーリー東北に1回、本プロジェクトの様子が発信された。

## ■ 次年度の展望

実現性の高い提案を実行していき、課題解決につなげていく。

## 5. 弘前大学ダイバーシティワークショップ

**弘前大学  
ダイバーシティ  
ワークショップ**

2016年1月22日(金) 18:00-20:00  
@集会所indriya (弘前市大字氣路町4-6)

性別、国籍、人種、民族、宗教、年齢、障がい、性傾向、性別自認、家族の構成、ライフスタイルなど、多様な人々の生活環境を尊重しています。グループワークを通して、多様な人々を尊重し、暮らしやすさ、働きやすさ、学びやすさ、暮らしやすい地域づくりについて一緒に考えてみましょう。

**参加無料  
託児付**  
託児料は別途  
1000円です  
(18時～19時)

主催：学芸センターに属する地域住民、弘前大学生・教職員30名程度  
主催：弘前大学  
中心：弘前大学立地推進室 (担当：野田)  
Phone 0177-39-2264 Fax 0177-39-2320  
メールでのお問い合わせはメールフォーム(下記URL)から  
http://oc.hiroshima-u.ac.jp  
弘前大学女子学生福祉推進室 (担当：山下)  
Phone 0177-39-2688 Fax 0177-39-2689  
Email: zsh@hiroshima-u.ac.jp

## ■ 概要

さまざまなワークショップを通じて、学内や地域に既に多様な人々が暮らしていることへの気づきを高めるとともに、ひとりひとりにとって学びやすく働きやすい弘前大学、暮らしやすい地域づくりについて考えた。本学男女共同参画推進室の山下梓助教とCOC推進室が連携して実施し、本学学生を中心に計16名の参加があった。

■ 目的

- (1) 異なる価値観に触れる機会を設け、グローバルマインドを高める。



ワークショップの様子

■ 成果

- (1) 多様性への気づきや、気づかないことでの排除ということに気づく事ができた。
- (2) 参加した学生のうち6名が、次回のワークショップの企画運営に携わりたいと意思表示した。

■ 次年度の展望

次年度は学生が主体的に企画運営をしていき、地域住民の参加もさらに促していく。

## 6. 弘前のオトとモノ

地(知)の拠点 弘前大学 地域教育プロジェクト vol.4

# モオ弘 ノト前 との

2016.2.7 [Sun]  
13:00-17:00  
(12:30 弘前大学正門前集合)

### スペースデネガ

【弘前市上瓦町1-2】

参加費無料 要事前申込 (2/1まで)

講師 今田 匡彦  
【弘前大学教育学部教授、音楽教育学者・音楽家】  
高橋 憲人 【弘前大学大学院地域社会研究科1年】

主催 国立大学法人弘前大学  
【問合せ・申込先】 弘前大学COC推進室(西村)  
TEL 0172-39-3863 / k-nishi@hiroaki-u.ac.jp

プロジェクト概要



普段、当たり前のこととして見過している、暮らしの中のオトやモノに着目し、そもそも音楽とは何なのか、工芸とは何なのかをワークショップ形式で体験的に捉え直します。

日々の暮らしの中から立ち現れる〈音楽〉と〈工芸〉の存在に気づく体験は、参加者の皆さんに音楽を聞くための耳、工芸を眺めるための眼を開かせるはず。

芸術に興味のある方、新しい地域おこしの形を模索したい方、創造的な職業への転職を希望する方の参加を歓迎します。なんとなく興味のある方の参加も大歓迎です。

■ 概要

本学教育学部今田匡彦教授と、地域社会研究科1年高橋憲人氏を講師として、サウンドスケープ・ランドスケープの観点から、オトとモノに着目して弘前の環境を捉え直すプロジェクトで、11名の学生、4名の社会人の参加があった。自分の身の回りに溢れているオトやモノの質感に気づき、その質感を音楽や工芸の形で再現するワークショップを行った。

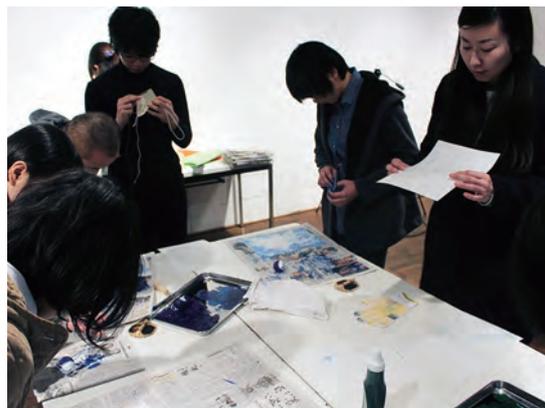
■ 目的

- (1) 普段看過している弘前のオトとモノの質感及びそれが自分に与えている影響に気づく。
- (2) 弘前のオトとモノの質感の再現を通して創造性を発揮する構えを築く。

## ■ 課程

プロジェクトは2部構成で行った。1部(サウンドスケープ)では、弘前の音を採取する「サウンドウォーク」を実施、その後、模造紙を使って音を鳴らしたり、その音を音楽として構成するエクササイズを行った。2部(ランドスケープ)では、身の回りのモノの質感を写真撮影し、その質感について議論した後で、版画の要領で質感を再現するエクササイズを行った。

この活動は「既存の音楽や工芸を縮小再生産するのではなく、自分の身体を通して感じられる自然のオトやモノの質感に気づき、その質感を自分の身体や身近な道具を使って再構成する」という芸術家の創作活動のモデルである。



ワークショップの様子

## ■ 成果

- (1) プロジェクト前には、気にもしなかった周囲の環境音・環境物の質感に気づき、更にそれを再現することが出来た。
- (2) エクササイズを通して、参加者全員が自分の体や身の回りの物を使った音楽や工芸の創作活動を完遂し、創造性の発揮に関する体験を培った。

## ■ 次年度の展望

参加者の創作への高い意欲が今田教授から高く評価され、来年度も今田教授のゼミと共催してワークショップを開催することが決定した。